

# 「慈悲」

令和四年十一月二十五日（金）  
五泉市永谷寺 吉原東玄 合掌

仏がすべての衆生に対し、生死輪廻の苦から解脱させようとする憐愍の心。

智慧と並んで仏教が基本とする徳目。

## 【慈と悲】

慈悲の「慈」(maitri)は、mitra(友)から派生した「友愛」の意味をもつ語で、他者に利益や安楽を与えること(与樂)と説明される。

一方、「悲」(karuna)は他者の苦に同情し、これを抜済しようとする(抜苦)思いやりを表す。

ただし、漢訳仏典では後者を「慈悲」と訳す例も多い。両語の意義の差については、上掲の「与樂」と「抜苦」が一般的で、南伝仏教の注釈も、「慈」とは利益と安楽をもたらそうと望むこと、「悲」とは不利益と苦を除こうと欲することと説明する。

あるいは衆生が苦を身に受けていると観ずるとき「悲」がおこり、自分がかれらを解脱させようと思うとき「慈」がおこるともいわれる。

また、「慈」を父の愛に、「悲」を母の愛にたとえることもある。

初期の仏教では「慈」が多用された(例えば『スッタニパータ』)が、後に「悲」と併称されるようになり、さらに二語のほかに「喜」(他者の幸福を喜ぶ)と、「捨」(心の平静、平等心)の二つが加わって、「四無量心」あるいは「四梵住」の名で、修行者のもつべき基本的徳目の一種とされた(この利他心によって、衆生は無量の福德を得、修行者は梵天の世界に生れるという)。

一方、仏徳をあらわすには「大慈大悲」と「大」の字を付すが、とくに大悲が仏徳の象徴として語られるようになる。  
抜苦与樂。

(引用：『岩波仏教辞典』第二版)

## ○ 慈悲 || 憎む相手を赦す

最後は、【憎い相手を赦す、その自分を許せるか】である。